

# 旭

印刷を支え加工を活かす



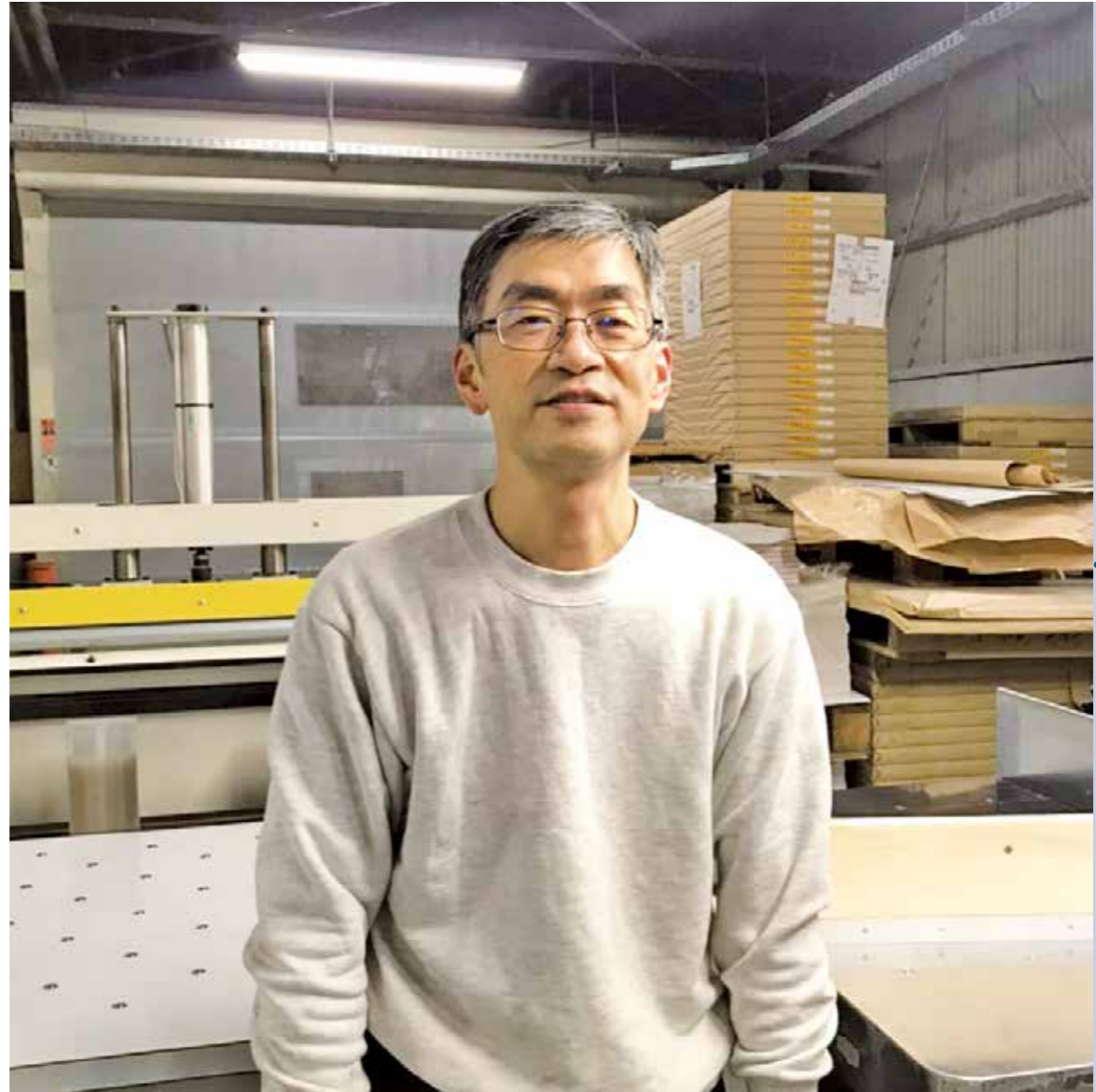
裁」です。平断裁の前には紙をきちんとそろえる作業が必要となりますが、そのスピードがとても早かったです。

私も無線綴じ部門で平断裁をする機会がありますが、紙をそろえる手際に関しては、断裁部門のようには1日中紙を触っている人にはかないません。前職で主に作っていたのは電話帳で、紙に厚みがあったりそろえやすいものでした。一方、旭紙工ではチラシ向けなどの薄い紙も扱います。薄い紙だと、そろえる際にインクがくっついてしまったりしてズレも生じやすいのですが、当時の断裁部門の担当者はとても上手くさばっていたのが印象的です。

## 村田 浩二

工場本部 本社工場 無線綴じ部門

旭紙工株式会社の本社工場で、立ち上げ当初から無線綴じの部門を支え続けてきた村田浩二さん。無線綴じ製本においては、前職での25年の経験も含め、40年ものキャリアを積み上げてきました。そんなエキスパートともいえる村田さんに、仕事への思いや、次なる目標について伺いました。



——失敗をしてしまった経験はありますか。

これまでで大きな失敗をした経験は、特にありません。小さなミスとしては、断裁で文字の上を切ってしまうことが何回かありました。そうした時は印刷所に報告し、もう一度印刷をしてもらっていました。

——製本の仕事を続けてきて、面白かったと思える経験はありますか。

「面白かった」とは少しニュアンスが異なりますが、変わった製本の仕事としては、母子手帳の作成をしています。背の紙が18枚で、小口側が36枚と、一冊の厚みが異なる作りが特徴です。厚みが異なると裁断時に斜めになってしまうため、抑える台を微調整するなど、技術力も求められます。ここ4、5年ぐらいで出てきた仕事で、昔は、こうした複雑な作りのものに関わる機会はなかったため、会社

も変化をしているのだと感じています。

——最後に、今後の目標を教えてください。

無線綴じの部門では、三方断裁の業務に長く取り組んできました。しかし、そろそろ先を見据えて、次の世代に技術を引き継いでいかなければなりません。機械の操作にもコツがありますが、長年、一人で作業を続けてきたため、そうした部分を理解している人が自分以外にいないのが現状です。機械の扱い方も含め、細かい部分についても伝えて育てていく必要があると思っています。一人が一つの業務に専念している今の状態が決して良いとはいえません。これまで培ってきたものを無線綴じの部門全員に伝え、誰もが一定以上の水準で作業できる状態を作り出していきたいと考えています。

40年の長きにわたり、無線綴じという一つの技術を磨き上げてきた村田さん。インタビューの様子

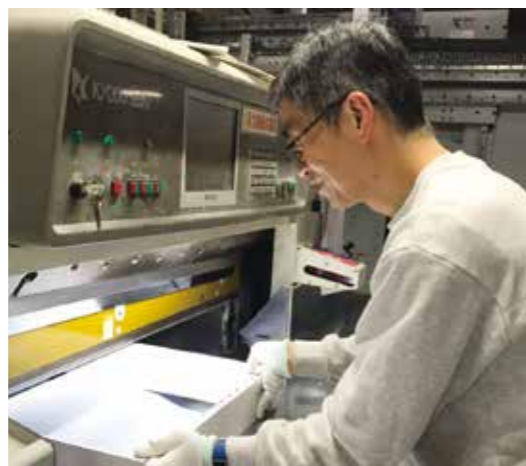
——旭紙工にはどのような経緯で入社されたのですか。

中学校を卒業してすぐ、前職の会社に入社しました。製本業に入社したのは偶然で、無線綴じの方法はそこで学んだ技術です。転職のきっかけは、勤続25年目の時に工場の移転が決まったことにあります。自宅からかなり遠い場所に通わなければならないという理由から、先に退職していた元常務の誘いで旭紙工に転職しました。無線綴じの事業も新しく立ち上がったタイミングだったので、転職後も自分の知っている知識をそのまま使うことができました。

——以前の会社との違いを感じた部分はありましたか。

入社したての頃は、旭紙工の職人たちの、紙をそろえる手際の良さに驚かされました。無線綴じ製本では、断裁の工程が2回あります。最初に大きな紙を切る「平断裁」と、ある程度本の形になった時に余分な場所を切り落とす「三方断

からも、その分野のプロフェッショナルとしての自信が伺えました。若い世代へ向けて、技術伝承の使命を掲げた村田さんの、これからの活躍にも期待が高まります。



### 企業情報

- ◆ 創立年：1983年1月
- ※ 創業：1963年
- ◆ 年商：15億円
- ◆ 従業員数：200人

※ 2018年12月実績

# 設備紹介

— ST 400・450 —



私が紹介します！



工場本部  
瓜破工場副工場長  
やまの ひろゆき  
山野 博之さん

瓜破工場で活躍する最新型の中綴じ製本機、ST 400・450。今回は山野さんに機能や使用上の注意点、そして今後の目標を伺いました。瓜破工場の皆さんが心掛けていることは、便利な時代になりつつある今、私たちにも共通して意識すべきことかもしれません。必見です！

ハンドルから  
自動に

最新型の導入

## Q. どのような機械なのでしょう？

中綴じ製本機です。ST 400・450はタッチパネルで寸法入力をし、その寸法に沿って動きます。これまでは、ハンドルで操作していましたが、自動で寸法出しができるようになりました。寸法出しは、製本の正規の寸法を入力する作業のこと。そして中綴じ工程は、折帖を丁合し、針金をセンターに打って、三方裁ちするものです。基本的に製本は、A4サイズが多いのですが、品物が変わった際はそのサイズに入力変更して、製本にします。

## Q. 現在の設備はいつ導入されたものですか？

ST 400は6～7年前、ST 450はおおよそ2年前に導入されました。ST 400・450は少しバージョンが違い、それぞれ1台ずつ設備されています。どちらも他社から譲り受けたもので、機械ごと入れ替えをしていただきました。

免許は不要！

絶賛研修中

オペレーターの  
エキスパート

便利になったから  
こそその再確認

さらなる成長

## Q. 使用するには資格や免許等は必要でしょうか？

資格や免許は必要ありません。しかし、刃を扱っているため、危険な設備です。分厚い本を切る工程があるため、安易に使用すると、巻き込まれ事故に繋がりがねません。違う機械にはなりますが、機械の調整をしている際に誤って手を入れたことで、事故を起こした例もあります。そのため、細心の注意を払って使用するよう指導しています。

## Q. 現在この設備を使用できる方は何名いますか？

6名です。オペレーターとして、機械調整や機械のセッティングをしています。



## Q. その中で一番「達人」は？

中西さんです。オペレーターとして、頻繁に機械を使用しています。慣れやセンスが必要であり、中心となって活躍しています。

## Q. 使用上での注意点はどこでしょうか？

ミスの主な原因は、思い込みでの入力や、文章の見落としです。ハンドルからタッチパネルになったことで、誰でもできるようになりました。しかし、便利になったからこそ機械に頼りすぎはいけません。確認作業を怠らず、細心の注意を払うことが重要です。

## Q. 今後の目標

まずは不良を出さないこと。そして、オペレーターの増員です。そのためには今年1年間、メンバーの教育に力を入れていきたいと思っています。

